



L I F E  
2024  
実践レポート集



社会福祉法人 太樹会



# 社会福祉法人 太樹会 第14回 実践報告

中期経営計画 2027

4 専門性と支援の質の追求

2022年4月～2027年3月の5カ年計画



Page	Title	Department
P4 ~ 5	姉妹での外出支援を通して	三輪ユニット 吉野ユニット 二上ユニット 医務室
P6 ~ 7	生活者の想いに寄り添った支援を実現するために ～スマイルプロジェクト～	高円ユニット 飛鳥ユニット 医務室
P8 ~ 9	記憶に残る新しい体験を支援する	葛城ユニット 龍田ユニット 医務室
P10~11	活気ある生活を過ごしていただくためにできること	玄武ユニット 白虎ユニット 医務室
P12~13	排せつデータレコーダの試験運用からわかったこと ～科学的根拠のある排せつケアにつなげる～	朱雀ユニット 青龍ユニット 医務室
P14~15	歩行分析 AI トルトを活用した転倒予防教室での 転倒リスクの軽減	デイサービスセンター和里（にこり）
P16~17	眠りスキヤンの導入に向けた現状把握	施設ケアマネジャー 事務室






P18~19	記憶と加齢の関係性 ～記憶力は加齢と共に低下していくのか～	天羽ユニット 飛龍ユニット 事務室・医務室
P20~21	利用者、生活者と家族様との思い出の共有	大和ユニット 万葉ユニット 事務室
P22~23	トルト（歩行分析 AI）を活用した記録と記憶に残る 成果	デイサービスセンター和里（にこり）香芝 ケアプランセンター



P24~25	昔の記憶や出来事を思い出すきっかけづくりを 身近にある“食事”で行う	畝傍ユニット 香具ユニット 耳成ユニット 事務室・医務室
--------	---------------------------------------	---------------------------------------



Rank	Department	Title	Page
	和里（にこり） 葛城ユニット 龍田ユニット 医務室	記憶に残る新しい体験を支援する	P8 ~ 9
	和里（にこり）香芝 デイサービスセンター和里（にこり）香芝 ケアプランセンター	トルト（歩行分析 AI）を活用した記録と記憶に残る成果	P22~23
	和里（にこり） 朱雀ユニット 青龍ユニット 医務室	排せつデータレコーダの試験運用からわかったこと ～科学的根拠のある排せつケアにつなげる～	P12~13
	和里（にこり） デイサービスセンター和里（にこり）	歩行分析 AI トルトを活用した転倒予防教室での 転倒リスクの軽減	P14~15
	和里（にこり） 施設ケアマネジャー 事務室	眠りスキヤンの導入に向けた現状把握	P16~17

外部評価の皆さま、ご多用のところご協力ありがとうございました。  
惜しくも入賞にならなかった皆さま、報告ありがとうございました。



二上ユニット 三輪ユニット 吉野ユニット  
高円ユニット 飛鳥ユニット 玄武ユニット 白虎ユニット



天羽ユニット 飛龍ユニット 大和ユニット 万葉ユニット  
事務室 医務室



畝傍ユニット 香具ユニット 耳成ユニット  
事務室 医務室



## 姉妹での外出支援を通して

私たち

部署： 三輪, 吉野, 二上, 医務

施設名： 和里(にこり) 高田

報告者： 金崎 莉奈

### 取り組みのねらい

姉妹の記憶をつなぎ、心地よい関係になるきっかけを作る

姉妹で別のユニットに入居されている。入居前は、お互いが結婚するまではお店を一緒にされていた。お互い結婚後、何十年と会っていなかった。

姉 2024年3月入居

「もう兄弟はあの子しか残ってないね」と1年ほど前に入居してから妹様のユニットに行き、一緒に過ごされている。1階へ行かれたり駅の方まで歩くことが多い。その際「暇や」と言われていたり、ユニットへ戻ってきてはあたりを見渡してどこかへ行かれることが多い。

妹 2019年8月入居

入居後は一緒に話したり同じユニットの方々と話をしたり同じ時間を過ごされている。病院受診以外の外出はほぼない。

今回、外出をすることにより幼いころの思い出にプラスし、これから先で「あの時一緒に行ったよね」と思い出話として1つの話題作りになるのではないかと。また、お二人のニーズやしたいことなどを1対1で向き合うことによりここで生活を送るにあたり何か役割や「ここにいていいんだ」「安心する」と思ってもらえるのではないかと。



姉



妹

## 取り組みの内容

姉妹での外出支援, 1週間後にインタビューを行う

10月11日, 大和高田市にあるスーパーと猫カフェへ外出する。外出先にて物や猫を見たり話をしたり写真を撮る。

1週間後, それぞれの生活者へ印刷した写真を見ていただき, その時どう思われたのか, などを話す。



## 取り組みの成果

記憶に働きかける工夫づくり

外出中, 姉妹での会話はほとんどなかったが目をキラキラさせて猫の話をされたり猫に夢中で幸せそうに過ごさせていたのが印象的だった。外出2日後に姉様が隣駅まで一人でへ行かれることあり。外出したことがきっかけだった可能性がある。外出1週間後, 撮影した写真を右記の様に整えお二人にお渡しした。「ありがとう。写真撮ってくれたもんねー」と部屋に飾ってくださった。外出したことでお二人の記憶をたどるのは難しかったが, 写真を部屋に飾りいつでも見れるようにしたことで今後外出の思い出を振り返るきっかけづくりになったのではないかと。また, 今後お二人をつなげる話題の一つになるのではないかと。また今回, 支援職でも情報を共有し話を広げていくことでその方の思いや望まれていることを知ることができたのではないかと考える。



# 生活者の想いに寄り添った支援を実現するために ～スマイルプロジェクト～

## 私たち

部署： 高円(B)ユニット，飛鳥(A)ユニット，医務

施設名： 和里(にこり)

報告者： 藤川友紀 小山敦功 吉田和也 岡本玲奈

## 取り組みのねらい

様々な視点から生活者に目を向けることで，新たな気づきを得られる。  
その気づきが，生活者が自分らしく生活できることに繋がる。

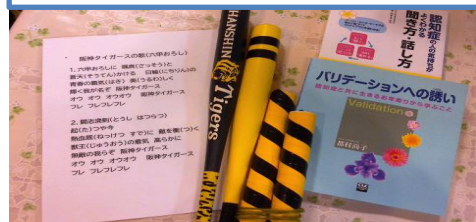
新しく入居されたA様の家族より，「認知症の世界ってどんな風に見えるのかな.ちゃんと分かっているのかな.」と，支援員に話されることがあった.認知症への知識はあるが，生活者や家族の感情や想いに，きちんと目を向けることができていたのか.その部分に注目する支援技術を学ぶことが，パーソン・センタード・ケアの向上に繋がるのではないかと考えた.

【A】田中様(仮名)はアルツハイマー型認知症である.日常的な会話の中で「分からへん」と強張った表情をされていることから不安やストレスを感じている様に見える.ところが，前職の話をするとう表情が明るくなり，多弁になることが分かった.

そこで，PCC「認知症の人を理解する手がかかり」の「生活歴」に着目し，田中様にとって価値の上がる感情の表出に焦点を当て取り組みを実施した.



医務，支援員や家族様，OT，事務所の方等にご協力頂き，心から感謝致します。



## 取り組みの内容

今回は、支援方法を工夫し、生活者の感情や記憶の表出をねらった。評価法は、職員アンケートやマッピングを活用する。

ある手法を参考にした支援法を医務からの助言も頂きながら、各週で学んだ。具体的には、「(1)リラックス(2)アイコンタクト(3)生活者の言葉を繰り返す(4)思い出話」を実践した。(1)は、支援員自身の感情をコントロールし、集中力を高めた。

【A】①思い出話（主にクリーニング屋）を受容共感傾聴する。記憶を辿り人生を振り返る。

②洗濯物たたみやアイロン掛けを、会話を交えながら支援員と行う。③取り組み実施前後にDCMを実施し、良い状態・良くない状態を比較。



## 取り組みの成果

Bは、穏やかに過ごし、歌を通して生活者同士の繋がりに気を配っていた。Aは、田中様ができることを見出し発揮できるよう支援できた。

【B】『六甲おろし』という曲は、阪神タイガースの応援歌であり、10名中6名が興味を示した。楽しみながら歌唱され、生活者から当時の思い出話も伺えた。1カ月後のマッピングでも曲を流すと、生活者の爽やかな歌声が響いていた。家族と過ごした時間は、色褪せない思い出だったと思われる。一つ一つの支援動作を改めて学び、意識や観察の視点を持って行動したことで、評価にも繋がった。

【A】①クリーニング店経営の話色々されていたことから、プライドを持って仕事をしていたことが分かった。②自信を持ち積極的に行った。支援員にアドバイスもしていた。③9月DCM結果は、良い状態・良くない状態ともに認められず、+3+5となる関わりを考えられるか、という課題を残した。11月DCM結果は良い状態・良くない状態ともに認められ、アイロン掛けについて、意欲的に取り組まれるという関わりを持っていた。アイロン掛けや衣類たたみはケアプランに反映された。今回は意思疎通が可能な方を対象とし良い結果となった。意思疎通が困難な方へのアプローチが課題である。

- (1) リラックス  
集中力が増し意識する事で、冷静さを保つ事ができた。
- (2) アイコンタクト  
相手の感情を汲み取り易くなった。視線の変化や焦点の動き等で、興味や関心を把握するのに役立った。
- (3) 生活者の言葉を繰り返す  
本人の言動を受容し、同調することで、その奥に潜む感情や欲求を理解する事が大切だと感じた。
- (4) 思い出話をする  
家族との会話も増え、共に本人を支えるチームとして信頼関係

## 記憶に残る新しい体験を支援する

## 私たち

部署： 医務（本館）OT，龍田ユニット，葛城ユニット

施設名： 社会福祉法人太樹会 和里（にこり）

報告者： 藤本 由美，植田 信恵

## 取り組みのねらい

和里（にこり）に入居されて以降，記憶に残るような新しく楽しい体験を，ユニットから生活者に提案・支援できているか。

生活者が昔の思い出について話すとき，自然と笑顔が浮かび，なつかしげに饒舌に語ってくださる。ただ，入居されてからの思い出を同じように笑顔で話してくださることは，残念ながらもなかなかない。

認知症の方は，昔のことをよく覚えておられる反面，最近のことを忘れてしまいがちになるが，それを差し引いても，記憶に残るような新しい体験をユニットで提供できていないのが現状である。

生活者Aさまはイカ飯が好物だが，いまままで自分でつくったことがないと話しておられた。今回，Aさまにとってはじめてのイカ飯づくりを体験していただくことで，新たな思い出づくりになればと考え，実践した。また支援員にとっても，生きるために必要な支援に意識が集中しがちになるが，生活者にとって，こういった体験がどれほどその方の心に残り，日々が活気づくか，その重要性を再認識することもあわせてねらいとする。



## 取り組みの内容

うまれてはじめてのイカ飯づくり。

ユニットで、Aさまと支援員と一緒にイカ飯をつくり、昼ごはん時に生活者や支援員にふるまう。

なお対象者および家族に実践発表の趣旨を口頭で説明し、写真の使用についても同意を得た。また個人情報の保護や秘密保持に配慮し、得られた情報は実践発表以外の目的で使用しない。



## 取り組みの成果

記憶に残っても残らなくても、心が動くようなひとときを過ごすことは、人生においてかけがえのないものになるのではないか。

イカに米を詰めるなど、率先して意欲的に料理をしておられた。他生活者や支援員と一緒に食卓を囲み、笑顔で完食された。またこの実践の2週間後、テレビで料理番組が流れた際、「この間、イカ飯ありがとう。ここであんなんつくって食べれると思わなかった！」とご自身から話題にし、繰り返し笑顔で話された。

今回は新たな体験がAさまの記憶に残っていたが、たとえ記憶に残らず、忘れてしまったとしても、そのときに楽しかった、大変だった、幸せだったという事実があるかぎり、こういったひとときはその方にとってかけがえのないものになると考える。

今後はご家族も一緒に体験できるような機会を設け、ご家族にも、生活者とのあたたかい記憶や思い出が残るようなかわりや支援をしていきたい。



## 活気ある生活を過ごしていただくためにできること

### 私たち

部署： 玄武ユニット，白虎ユニット，医務（本館）

施設名： 和里（にこり）

報告者： 宮田，河本，野尻

### 取り組みのねらい

#### 活気ある生活をしてほしい

日中，車いすで傾眠状態が続いていたり全く覚醒せず寝ておられたりすることが多い。覚醒されていても食器を持ち動かれたり，使用中のトイレを開けられる，車椅子を自操し，他の生活者の居室の扉を開けられるなど，落ち着かないことがあったり，表情も陰しく活気がない。

昔，看護師や幼稚園の先生をされておりピアノや童謡などが全部好きですとの本人の意向があったため，幼稚園の先生時代になじみがある，ピアノやキーボード，童謡，懐メロのCDを聞いてもらい，昔の記憶を思い出して活気のある生活を送っていただくことにつなげたい。



## 取り組みの内容

以前に経験していたことや興味のある活動の時間を提供する。

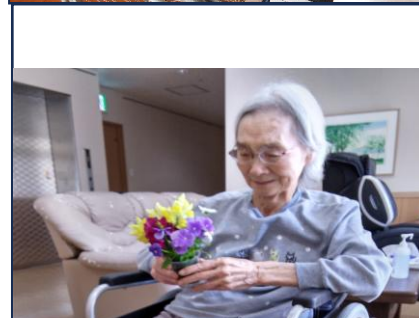
日々の生活の中で童謡・懐メロのCDを聞いてもらう。キーボードを弾く、歌の本を見てもらう。現在は洗濯物のタオルたたみや、不定期にはなるが、石舞台のピアノ演奏に行くなど、その日のご様子に合わせて、活動提供をおこなった。



## 取り組みの成果

本を見ながら歌ったり、目次を声に出して読み上げたり、キーボードを弾く日もあった。しかし、日中に覚醒されず丸二日寝て過ごすこともあり、満足に取り組めなかった。

うとうとした状態がよく見られた。丸二日寝て過ごしてから覚醒した日は、表情も穏やかで言葉も柔らかかった。活動的な日は気分の変化があり、笑顔で話したり歌う日もあるが、急に機嫌が悪くなり、言葉かけをしても「そんなの知らないわよ」等、言われることもあった。また、起きても活気のない日はベッドで休んでいただくことが多かった。寝て過ごす日が多く、満足に活動を取り入れた生活をしていただくことが出来なかった。覚醒している日の一日の過ごし方を見直し、マッピング等での客観的な観察が必要だと感じた。この方の生活リズムを見直すことが必要という課題が見つかった。今後、この方の生活リズムを見直し、覚醒時間を増やし、なじみの活動を取り入れた生活を送ってほしい。



## 排せつデータレコーダの試験運用からわかったこと ～科学的根拠のある排せつケアにつなげる～

### 私たち

部署： 朱雀ユニット，青龍ユニット，医務室

施設名： 和里（にこり）

報告者： 上村 成美

### 取り組みのねらい

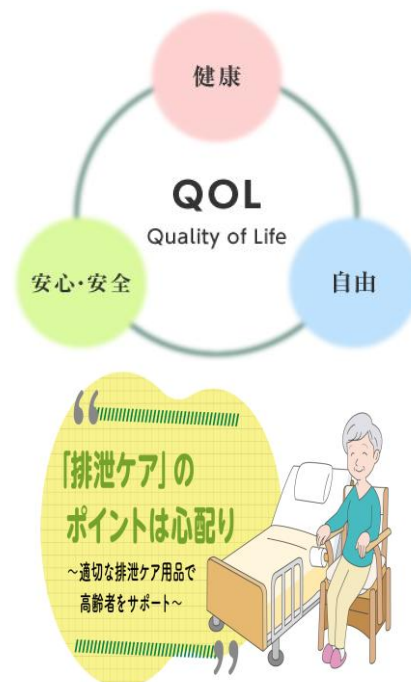
正確な排せつデータをとりたい。でもマンパワー不足…  
羞恥心に配慮し、尊厳を守るためにはどうすれば…？

### 取り組みの背景，課題，目標など，

排泄ケアにおける重要な視点は「生活者のプライバシー・尊厳に配慮することである」と言われている。一人ひとりに合わせた排せつ時間・物品の選定もQOLを維持するために重要な視点となってくる。

いわば介助者による介入方法が大きく左右する支援ともいえる。しかし、介助者のマンパワー不足も大きな課題となっている。例えば、生活者1名につき、1週間1時間間隔で排せつデータをとって記録、分析していく工程が理想ではある。だが、実際に日々支援をしている中で、マンパワー不足感を大きく感じ、特に1時間に1回の排泄支援の介入はより困難だと感じ悩んでいた。

そんな時、A企業から5日間、24時間排せつデータを計測できるモニターの提案を受け、現在課題と感じている解決の糸口につながるのではないかと考え取りくんだ。



## 取り組みの内容

5日間、24時間体制で専用の機械を導入し、排せつ済みパッドと照らし合わせデータ検証。

### ▶データを取る前

- ・排尿量は測定していたが、実質量しか分からなかった。
- ・排便がいつ、どのタイミングで出始めていたのかは分からなかった。
- ・量にだけ合わせて排せつ物品の選定を行っていた。その時間帯も同排尿量に近いのになぜ臀部が赤くなるのか分からなかった。



## 取り組みの成果

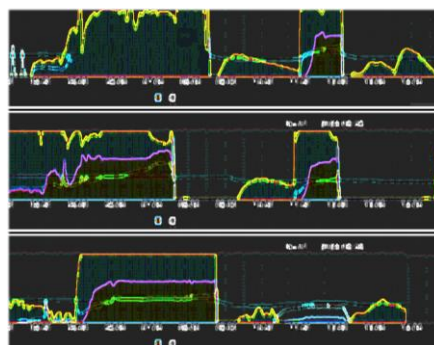
科学的根拠に基づく支援と日々の小さな気づきを共有することで、より個別ケアに繋がる。

### ▶データ分析後改善し実践した内容。

- ・より詳細に排尿の出るタイミングや逆に排せつ支援が刺激になり交換直後に出ている生活者がほとんどだった。排せつ支援の前に長座位になっていただき排尿を促した。
- ・一度に排便が出るのではなく、時間をかけて少しずつ排便が出ていた。下剤の服用時間を再検討するきっかけに繋がった。
- ・排尿の出方が朝と夕方に違いがあった。終始ずっと少量ずつ出ていることが分かった。朝と夕方でスキンケア効果の高い尿取りパッドに変更し、赤みが消失した。

現在介護業界にも科学的根拠が、より必要な時代となっている。しかし、支援員の日々の小さな気づきもなければ分からなかった点もあると感じている。双方の強みを生かし、今後も生活者のQOLの維持と向上につながる支援を目指したい。

Date	時刻	Event	排泄内容	排泄物重量 (g)	画像
2024/6/5	1:30	正臥交換	排尿	150.9	
2024/6/5	7:15	正臥交換	排尿	246	
2024/6/5	13:00	正臥交換	排便	404	



※倫理的配慮の為、一部変更しています

# 歩行分析AIトルトを活用した 転倒予防教室での転倒リスクの軽減

## 私たち

部署： デイサービス  
 施設名： 和里（にこり）®  
 報告者： 機能訓練指導員 寺田 剛明

## 取り組みのねらい

転倒しない体づくりを実施し

いつまでも元気に地域で生活する。

大和高田市より業務委託を受け、2024年度  
 転倒予防教室を開催することとなった。

今年度は歩行分析AI『トルト』を導入し  
 転倒リスクを数値化・見える化を図ること  
 で、個人の詳細な弱点を分析し教室内の運  
 動・自宅での運動につなげていく。

いつまでも『記憶』に残るような教室に  
 なるよう楽しんでいただくことを目標に終  
 了月に今回の教室での満足度・充実度につ  
 いてアンケートを実施する。

（転倒予防教室 参加者33名）

大和高田市委託事業  
 参加費 無料  
**和里（にこり）**  
**転倒予防教室**  
 実施期間：2024年7月～12月  
 大和高田市 市民限定（65歳以上）  
 6ヶ月間、継続して  
 毎週参加できる方

① 歩行・転倒リスクを分析  
 歩行分析AI『トルト』と、株式会社エクスワイヤーズ  
 ㈱ を活用して歩行状態を把握します。AIにより転倒の  
 リスクを分析し、個人個人に合った運動プログラムを提  
 供します。

② 運動だけでなく脳も活性化  
 脳活性化メソッド『シナプソロジー』のインストラクター  
 による認知機能低下予防訓練を実施します。楽しく脳  
 を活性化させて認知機能を向上します。

③ 様々な専門職による講話  
 和里（にこり）に在籍する専門職により講話を実施。香  
 藤節、管理栄養士、介護福祉士、作業療法士などが、様  
 々なテーマで講話をします。

開催曜日・場所 ①～④のコース選択（途中変更はできません）

● 和里（にこり）	● 定員各25名	● 隣西公民館 ● 定員10名 （大和高田市市場276-1）
火曜 ①13:30～14:30 ②14:40～15:40		木曜 ④13:00～14:00
木曜 ③14:15～15:15		

歩行分析AI『トルト』について…

スマートフォン・タブレットで歩行動画  
 を3～5秒撮影し、動画を投稿するとAIが歩  
 行状態を解析し数値化する。速度・リズ  
 ム・ふらつき左右差の4項目を分析するこ  
 とで、歩く力とバランスを確認できる。

スマホで歩行の様子を  
 動画を「撮る」だけで、  
**簡単歩行分析**

理学療法士の知見を基に開発された  
 AIが現場のアセスメントを支援。

## 取り組みの内容

トルトを活用し、プログラムを組み立て実施する。

AIで歩行状態を1か月ごとに測定。その結果を基に、運動プログラムを組み立てて実施する。測定結果をご自身で確認しながら、自身の弱点を説明し、総合的な体作りを中心に実施。自宅では、トルトで測定した弱点を補うようなトレーニングメニューを提供した。また1か月に1回程度で多職種による講話・シナプソロジー\*を取り入れることで、健康意識・認知症予防にも取り組んだ。（シナプソロジー\*についてはQRコード参照→）



## 取り組みの成果

体力の向上・生活の変化

トルトで撮影した点数の全参加者の平均が半年間で15.6点（7月）→19.1点（12月）の変化が見られた。点数の向上も大きくみられたが、「杖を使用していたが杖なしで室内の生活ができるようになった」「家族に歩くスピードが速くなったと言われた」など日常生活での運動能力の向上を実感された方もおられた。参加者のアンケートには、「地域のウォーキングサークルできるようになった」「自宅でもしっかり運動するようになった」「来年も絶対参加したい」という言葉が、『記憶』に残るような転倒予防教室になったと考えられる。ICT（トルト）を活用し生産性を向上させ、今後も地域の方々を元気で健康にできるよう、取り組みたい。



## 眠りスキャンの導入に向けた現状把握

私たち

部署： 事務室

施設名： 和里（にこり）

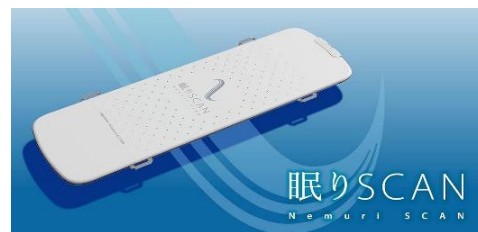
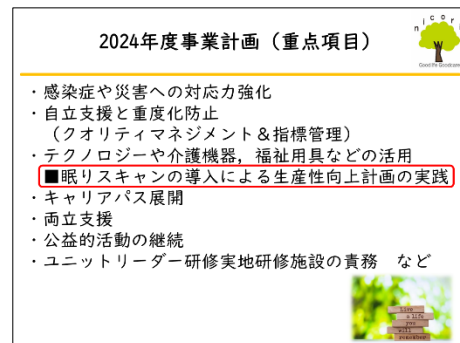
報告者： 増田 千晶

### 取り組みのねらい

#### 眠りスキャンの導入による生産性向上計画の実践に向けた現状把握

近年、介護業界における人財不足の深刻化から、厚労省によりテクノロジーの活用が促進され、2024年度の介護報酬改定で生産性向上推進体制加算が新設された。

現在、和里（にこり）では複数のICT機器を導入しているが、2024年度事業計画の重点項目である、眠りスキャンを新たに導入するべく、2024年3月に2ユニットを対象に2週間のデモ機を導入した。ベッドに設置したセンサーにより、体動（寝返り、呼吸、心拍など）を検出して“記憶”することや、訪室のタイミングを図ることが可能となる。また、良質な睡眠を得ることにより、生活リズムが改善され、“記憶力”や認知機能、ADLやQOLの維持・向上に繋がることが期待される。支援者側においても、訪室回数の削減や生活者の健康状態などをモニターで把握でき、心身の負担軽減の方策となる。しかし、現時点で本格的導入に至っていない現状があるため、今回の実践発表では、眠りスキャンの導入による生産性向上計画の実践に向けた現状把握をおこなうことを目的とした。



## 取り組みの内容

デモ機を導入した2ユニットの支援職を対象に、アンケート調査を実施

【対象】2ユニットの支援職9名

【期間】2024年10月2日～10月20日

【方法】眠りスキャンの使用における

①効率の変化、②気持ちの変化、③負担軽減、④生活者の安全やケアの質の向上の期待、⑤導入の効果、について無記名での質問用紙による3件法の選択式と自由記述式により実施し、集計した。

【倫理的配慮】調査の趣旨について文書にて説明をおこない、個人情報の保護および秘密保持について配慮をおこなった。

【眠りスキャンを使用して】アンケート調査のご案内

- 調査の目的  
2024年度の事業推進として「眠りスキャン」の導入に向け、現状把握と導入に向けた調査を行います。
- 対象者  
2024年3月にデモ機を導入した現場のユニット、実用ユニット社員
- 調査方法  
匿名、アンケート用紙に回答する3件法の選択式と自由記述式により実施します。
- 調査期間  
2024年10月2日（水）～10月20日（日）
- 倫理的配慮  
調査の趣旨について文書にて説明をおこない、個人情報の保護および秘密保持について配慮をおこなうこととします。
- 調査結果への活用  
調査結果への活用は、アンケートの回答をもって得られたものにとさせていただきます。
- 調査実施者  
社会福祉法人 高齢者 科 課（仮）事務局
- その他  
「2024年度 高齢者生活支援プログラム」により実施します。

※2024年10月20日（日）までに、事務局へお返しいただきたい。  
ご多岐に参ります。ご協力をお願いいたします。

【眠りスキャンを使用して】アンケート調査

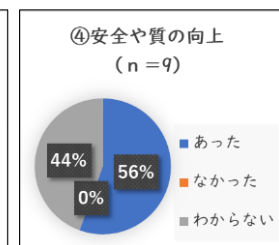
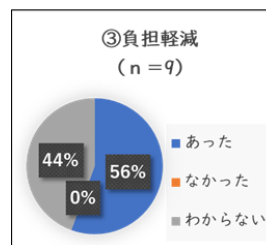
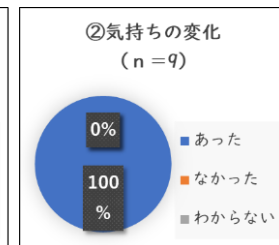
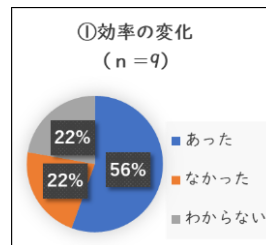
- 「眠りスキャン」の導入により、支援の取り組みや効率に変化はありましたか？  
 あった  
 なかった  
 わからない  
その理由を教えてください。
- 「眠りスキャン」の導入により、あなたの気持ちに変化はありましたか？  
 あった  
 なかった  
 わからない  
その理由を教えてください。
- 「眠りスキャン」の導入により、仕事の負担が軽減されると思いますか？  
 あった  
 なかった  
 わからない  
その理由を教えてください。
- 「眠りスキャン」の導入により、生活者の安全やケアの質の向上が期待できると感じますか？  
 あった  
 なかった  
 わからない  
その理由を教えてください。
- 「眠りスキャン」が将来的に役立つ、または役立つと期待できるものだと感じますか？

ご協力ありがとうございます。

## 取り組みの成果

アンケート結果から、事前説明の機会や効果検証の共有が必要である

2ユニットの支援職9名から回答を得た。①効率の変化では、訪室のタイミングが把握できた、事前説明がなく分からなかった、②気持ちの変化では、安眠妨害している気持ちが軽減した、③負担軽減では、支援の優先順位が立てられる、緊急時の早期発見に繋がる、短期間なので分からない、④安全や質の向上では、ADLやQOLの向上につながる、事故防止につながる、機械に頼りすぎてしまう恐れがある、⑤導入の効果では、睡眠状態や健康状態の把握ができる、使い慣れたら効果的、という意見があった。今後、眠りスキャンの本格的導入に向け、事前説明の機会や効果検証の共有が必要である。



- ⑤導入の効果
- ・事故防止につながる
  - ・睡眠状態や健康状態の把握ができる
  - ・覚醒状態の把握ができ、訪室のタイミングが分かる
  - ・生活の質やケアの質の向上が期待できる
  - ・使い慣れたら効果的だと感じる

## 記憶と加齢の関係性 ～記憶力は加齢と共に低下していくのか～

### 私たち

部署： 天羽ユニット，飛龍ユニット，医務，事務

施設名： 和里（にこり）香芝

報告者： 後藤弘司 月元真奈美 岸田絹代 井上幸江

### 取り組みのねらい

記憶力に関するテストを実施して、記憶力が加齢と共に低下するのかを検証する。

当法人では生活者一人ひとりがその人らしい暮らしが送れるよう、日々努めている。

その中で、生活者の「病歴や飲み薬」「好き嫌い」「過去の暮らし方」などの情報が記憶できなかつたり、覚えたこともすぐに忘れてしまうことがある。

記憶力は、一般的に20代をピークに加齢と共に低下すると言われている。一方で、年齢を重ねても脳の記憶は低下しない、ストレスや生活習慣とも関連があるという文献もある。

そこで、記憶力テストを実施し、記憶力は加齢と共に低下するのかを検証することとした。その結果、加齢と共に低下していたという結果であった場合、私たち職員は年齢を重ねるにつれて、どのようなことを心掛けていけばよいのか。生活者の状態の変化、飲み薬の変更など、新しい情報を記憶する方法や職員間の情報の共有化を工夫するきっかけにしていきたい。



## 取り組みの内容

和里（にこり）香芝職員25名を対象に記憶力テストを実施した。

「20代～30代」「40代」「50代」「60代」「70代」の5グループに分け、各5名の職員を対象とした。

テスト内容については、ワーキングメモリ（短期記憶）トレーニングを参考にした、図形の間違い探し・数字や文字を覚える問題・色を覚える問題・4日前の勤務を確認する問題計10問を対面で出題した。



## 取り組みの成果

平均点が最も高かった年代は、「40代」であった。

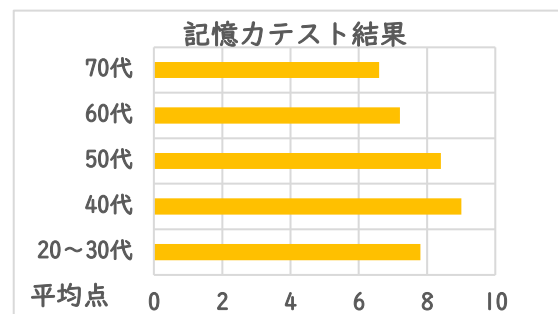
平均点が最も高かった年代が「40代」、続いて「50代」「20代～30代」「60代」「70代」という結果となった。また、点数は概ね加齢と共に低下しており、「60代」を境に大幅に低下している。

出題者の印象としては、「20代～30代」は時間を急ぐ傾向が見受けられ、「思い込み」や「早とちり」による失点が散見された。一方、「60代～70代」では、時間的な「間」を長くとり、タイムオーバーでの失点が多かった印象を受けた。

今回の結果から、私たちは年齢に応じた対応や共育を意識していく必要があると考える。今後は対象者の人数を増やしたり、職員に生活環境についてのアンケートを合わせて行うなど、生活習慣との因果関係があるかなども検証していきたい。

記憶力テスト結果

年代	5名の合計点	平均点
20～30代	39	7.8
40代	45	9
50代	42	8.4
60代	36	7.2
70代	33	6.6



## 利用者,生活者と家族様との思い出の共有

### 私たち

部署： 大和ユニット, 万葉ユニット, 香芝栄養,  
ショート相談員, 香芝総務

施設名： 和里（にこり）香芝

報告者： 杉本有花 細井理恵子 三好真友美 栗牧智子

### 取り組みのねらい

教養娯楽について理解し,生活者が家族と思い出の共有できるように働きかける。

生活者とその家族数名より,教養娯楽の内容についての問い合わせがあった。家族からは教養娯楽の内容について,生活者からはすることがない,他の生活者が何かをしているのに私には声がかからないなどの意見があった。職員においても教養娯楽の内容の理解が不十分な点もあった。和里（にこり）香芝で行っている活動の周知がされていないこともあり,生活者とその家族が思い出を共有,教養娯楽の内容を理解していただけるようにする。

教養娯楽の内容を周知するため,実施方法の見直し,ユニットにポスターを掲示し,机の上に掲示物を置いて生活者の目の届く場所に設置し,周知を促した。



## 取り組みの内容

ポスター作成によって記憶の定着を図る。

- ① 活動を行う際は日時や季節がわかるポスターを作成し、生活者が見えやすいように机の上に置く。
- ② お茶を楽しむ会の食活動の際は、メニュー表を作成し、飲み物についてはご自身で選んでいただくようにする。
- ③ お花を楽しむ日はお花の種類のパスターを作成、生活者とお花について話をしながら生ける。
- ④ 活動をした日は写真を撮影し、家族と思い出の共有ができるようにご利用表に記載し写真と一緒に用意する。

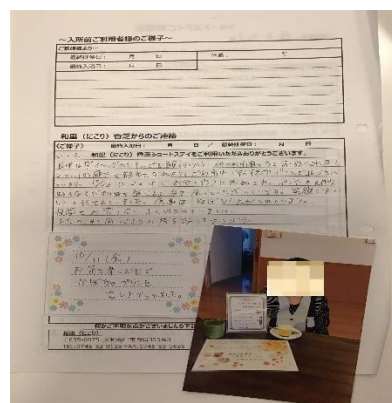


## 取り組みの成果

写真を見ることによって家族と思い出の共有をすることができた。

お花を楽しむ日は、お花の名前を見ながら「女学校時代を思い出した」と話し、家族が面会に来られた際、写真を見ながら活動時の内容を思い出して話され共有ができ、お互い笑顔が見られた。お問い合わせがあった家族からは、ご利用表に活動時のことを記載し写真を用意したことにより、お礼の言葉をご利用表や電話の際にいただくことができた。ポスターを掲示することで、少しずつではあるが、生活者の記憶、思い出にとどめることができたと考えられる。

生活者と家族のニーズに合った活動を検討し把握に努めていくことが今後の課題の一つである。



# トルト(歩行分析AI)を活用した記録と記憶に残る成果

## 私たち

部署： 香芝デイサービス, 本館居宅

施設名： 和里（にこり）香芝

報告者： 松田久美, 茨木美加

### 取り組みのねらい

トルト（歩行分析AI）を運動機能のモニタリングと評価として活用し、外出先まで歩いていくことで、運動の成果を実感していただく。

今年度7月より、香芝デイサービスでは個別機能訓練の提供が始まった。運動指導や運動の機会が増えて、ご利用者の活動量は以前よりは増えるが、運動の成果を実感していただくことは何かできないかと考えた。今回は運動機能の中でも歩行に着目し、記録に残る成果としてトルト（歩行分析AI）を活用し、記憶に残る成果として行きたい・行ってみたい場所へ【自身の足で向かう外出支援】を実施することとした。

倫理的配慮として3名の利用者・家族に取り組みの内容を説明し、同意を得た。また写真使用の同意も得た。

行先は近隣の喫茶店になった。目的地まで距離は短い。利用者が歩くと15分ほどかかるのではないかと予想された。交通量が多く、道幅も狭い。歩道もない場所があり、ふらつきがないよう歩く機能向上が必要であった。また店内に入るには手すりのない段を3段上ることになるが、初回のトルトの結果は少し不安なところがあった。



## 取り組みの内容

歩行状態を分析し、苦手や不安を解消できる個別機能訓練を実施する

7月からトルトを毎月初めに撮影し、状態を把握した。トルトは歩行を動画撮影し、20点満点(速度, リズム, ふらつき, 左右差を各5点)で点数化される。評価として出た歩行の課題を個別機能訓練として実施し、状態が維持・改善されるかを検証。状態の変化があれば実施内容を見直す。目標地までの道のりや環境を把握し、訓練プログラムに組み込み実際の道のりをイメージした訓練を実施した。



## 取り組みの成果

目標地まで訓練を思い出しながら、無事往復歩くことができた。

最終の点数は3名が19点との評価であり、目標地に片道10分で到着できた。課題であった道路の歩行も安定し店内に入るまでの段差も上ることができた。段差を上る際、訓練した記憶を思い出して下さり「ブロックを上ったね。」と言われていた。「帰りも歩こう！」と皆さんが言われ歩いていると雨が降り…「これは忘れられない思い出だわ～」と笑って言っておられた。

今回の結果、歩行状態が点数化されることで、記録を更新しようと熱心に訓練に取り組まれる姿がみられた。また解析結果を見ていただき苦手や弱点を知ることによって重点的に訓練ができ、自信を持って歩くことができたのではないかと考える。今後も点数化を活用しながら、目標や楽しみを実現できる機能訓練を提供していきたい。



## 昔の記憶や出来事を思い出すきっかけづくりを 身近にある“食事”で行う

### 私たち

部署： 畝傍ユニット，香具ユニット，耳成ユニット  
CM, 医務, 栄養

施設名： 香芝Ⅱ

報告者： 永田 明香 阪ノ上 千夏

### 取り組みのねらい

昔の記憶や出来事を思い出すきっかけづくりとして身近にある“食事”をテーマに家族と一緒に取り組みをしたい

生活者の多くは「記憶」にモヤがかかっている状態であるが、体感した昔の出来事や思い出は自身の記憶の中に残っていることが多いと考えられる。

そこで昔の記憶を思い出すきっかけづくりを身近にある“食事”で行いたいと思った。食事は多くの人々が楽しみにしている事のひとつであり、生きるために欠かせないものである。

そんな食事には様々な思い出が一人一人にあると考え、家にいた頃によく作っていたもの・食べていたものを再現することによって、その頃の記憶や出来事を鮮明に思い出すのではないかと考えた。

当時のものにできる限り近づけるため料理に携わる生活者には一緒に料理をしてもらう。料理ひとつでも調味料の種類や量で味が変わることや盛り付け方ひとつでも様々あるため、当日参加できる家族には協力してもらい、できる限り再現率を高めるように料理企画を行っていきたいと考えた。



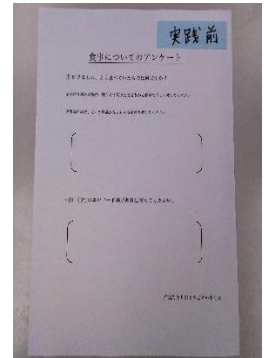
## 取り組みの内容

実践前,実践後すぐ,実践した翌日の計3回の聞き取りアンケートを行い,対象の生活者の反応を調査する

各ユニットから家族の協力が得られる生活者1人を選び,取り組みについて説明,家族に了承を得る

味付けや切り方など家特有の調理やエピソード等,できる限り書いてもらう。(事前アンケート)

実践後,聞き取りアンケートを行う.覚えがあった場合には 翌日にも聞き取り調査を行い,昔の記憶や出来事,エピソードを日にちが経っても覚えているか調査する.



## 取り組みの成果

当時の記憶を思い出すことはなかったが,当時に関わる行動がみられ家族とのコミュニケーションの機会になった

### ・ A様

とんかつを調理.重度の認知症の方ではあるが,料理を始めると車椅子から立ち上がり,自らトマトソースの量を調整.トマトも手早く切っていた.同じユニットに入居中のご主人は昔よく食べていた奥様の手料理を懐かしそうに食べていた.



### ・ B様

田楽鍋を調理.味噌の味を思い出の味に近づけるため家族と何度も味見をして調整していた.参加した家族がエピソードを話すも本氏はその当時の記憶はなかった.



食事を通して生活者に記憶を思い出してもらうことは難しかったが,その当時を思い出すような行動がみられた.また,生活者に昔よく作っていたものを再現してもらうことで,当時のことを思い出す家族の喜ぶ顔が見られた.今回の企画は昔の思い出とともに新たな思い出も築いてもらえる機会となった.今後の企画では生活者はもちろん,家族にも喜んでもらえるものをさらに考えていきたい.

